

# 小学校教員養成課程に在籍する大学生の組体操に対する意識

桧垣 淳子

## Consciousness of Gymnastics Formation for university students on a Elementary School Teacher Training Course

Junko Higaki

(2018年11月22日受理)

### はじめに

組体操は、運動会の花形種目として長い間親しまれてきた。しかし、ここ10年～15年の間に、ピラミッドやタワー等の演目はショー的な性格を強め、巨大化・高層化、さらに低年齢化が進んできた。SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の普及と相まって、全国の学校で、より大きくより高い組体操が広がりを見せる一方、巨大ピラミッドの崩壊事故がおこり、2014（平成26年）頃から組体操の安全性を懸念する声が高まっていた。日本スポーツ振興センターの調査<sup>1)</sup>によると「平成23年から平成26年の組体操事故の医療費支給件数<sup>（注1）</sup>はいずれも8000件を超え、負傷・疾病は、年平均約8600件程度で推移している」と報告しており、組体操の事故が少なくないことがわかる。特に小学校の組体操による事故件数は、跳び箱運動、バスケットボール、サッカーに次いで多く（6289件）、学校種別（小・中・高校）でみると全体の73%を占める（2014年度）。また、スポーツ庁が日本スポーツ振興センターのデータをもとに分析した結果、過去46年間に組体操の事故で9人が死亡、障害が残った子どもが92人に上ることがわかっている<sup>2)</sup>。

このような組体操の事故が多発していることを受けて、2016年（平成28年）3月、スポーツ庁は国としての指針をまとめ、「組体操による事故の防止について」という通知を都道府県教育委員会に出した<sup>3)</sup>。その内容は、実施にあたっては、校長の責任の下で組織的な指導体制を構築すること、各学校においては組体操のねらいを明確にし、児童生徒の習熟状況により、活動内容、指導計画を適時適切に見直すこと、タワーやピラミッド等の大きな事故につながる可能性がある組体操の技については、確実に安全な状態で実施できるかどうかを判断

し、できないと判断される場合には実施を見合わせることで等である。また、小学校においては、中学校・高等学校に比べて組体操の事故が多いことに言及し、事故につながる可能性がある危険度の高い技については特に慎重に選択することを明記している。さらに、「組体操の事故が発生している事実や具体的な事故事例、事故になりやすい技などの情報を、現場で指導する教員に周知徹底する」と明記されており、教員の意識を高めることにも言及している。以上のように、スポーツ庁は、組体操の実施に対して必要な措置を講じるよう求めているものの一律に規制や制限はせず、各学校が教育効果と危険性を考え判断するようにと通知した。そのため、廃止、継続等、各自治体・学校により対応は異なっているが、多くの学校では、ピラミッド・タワーの段数制限や組体操の廃止等の事故防止へ動いた。本学のある福岡市でも、2016年（平成28年）5月、全市立学校の運動会・体育大会において、組体操のタワー及びピラミッドを実施しないことが通知された<sup>4)</sup>。その結果、日本スポーツ振興センターのデータ<sup>5)</sup>によると、2011年～2015年では8000件台で推移していた事故件数が、2016年には4936件に減少している<sup>（注2）</sup>。事故が減少したという点においては、行政が動いた意義は大きい。しかし、段数制限をすれば安全とは言えないこと、安全な組体操の方法や指導法の確立はいまだに十分ではないこと、教員の組体操の事故や技に対する認識が十分でない可能性があること等、組体操を巡る課題は多いと考えられる。

本研究では、小学校教員養成課程に在籍する大学生に対して組体操についての意識、安全性や社会動向に関する認知度を調査することにより、教員養成校としてできることを検討するための資料を得ることを目的とした。

## 調査方法

### 1. 対象者

N 大学教育学部の小学校教員養成課程に在籍する学生、2 年生129名、3 年生106名、計235名を対象とした。男子学生55名 (23.4 %)、女子学生180名 (76.6 %) であった。出身地は、福岡県149 名 (63.4 %)、佐賀県31名 (13.2 %)、熊本県18名 (7.7%)、長崎県12名 (5.1%)、大分県9 名 (3.8%)、宮崎県5 名 (2.1%)、山口県3 名 (1.3%)、鹿児島県2 名 (0.8%)、その他6 名 (2.6%) であった。アンケートの回収率は100%であった。

### 2. 調査方法および期間

調査は、質問紙による自記式無記名で実施した。調査期間は、平成29年12月21日～平成30年1 月21日であった。

### 3. 調査内容

対象者の属性として、性別、学年、出身地及び進路希望を質問した。調査内容は、組体操の経験の有無、好悪感と理由、組体操に対する意識、組体操の事故や通知等に関する認知度等とした。

### 4. 調査結果・考察

#### (1) 組体操の経験

全体の93.2%が組体操の経験があると回答した (図1)。経験の時期は、小学校期が63.3%で最も多く、次いで中学校期17.9%、幼児期が12%と続いており、小学校期の実施率が高いことがわかった (図2)。組体操の好き嫌いに関しては、好きが39.5%、どちらかといえば好きが41.9%で、全体の8割以上は組体操を好意的にとらえていた (図3)。好きな理由としては、約半数 (52%) の学生が「達成感があるから」と回答しており、35%前後が「団結力がつくから」「感動するから」「運動会の花形であるから」「見ている人を感動させるから」「友達との仲が深まるから」の5つの理由

を選択した (図4-1)。以上のことから、組体操はともに練習をしていく中で達成感が感じられることや友達との仲が深まり団結力がつくこと、成功したときに自分自身も感動するところに面白さを感じていると推測できる。また、組体操は運動会の花形であり、見ている人を感動させることができるところにも魅力を感じていることがわかる。一方、2割の学生は組体操に好意的でなく、その理由として、約半数が「痛いから」と回答し、35%前後が「転落するのが怖いから」「練習がきついから」「人を持ち上げる・支えるのが怖いから」と回答している。練習の過程での痛みやきつさ、怖さに組体操の嫌な点があると感じていることがわかる (図4-2)。

#### (2) 組体操に関する意識

図5に示すように、「組体操の実施に対する賛否」は、

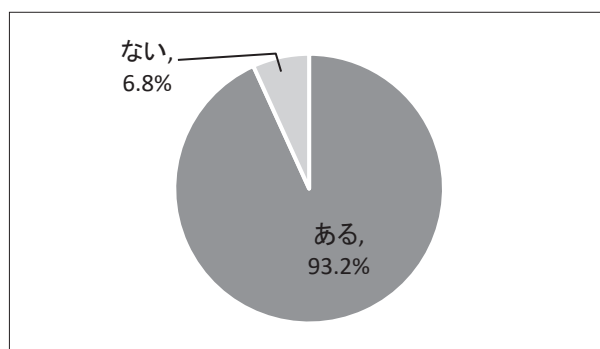


図1 組体操経験 n = 235

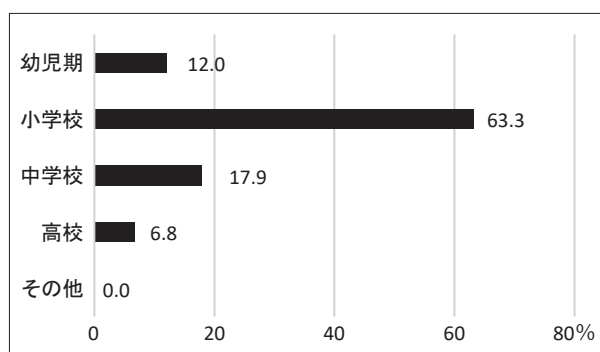


図2 組体操経験の時期 n = 235

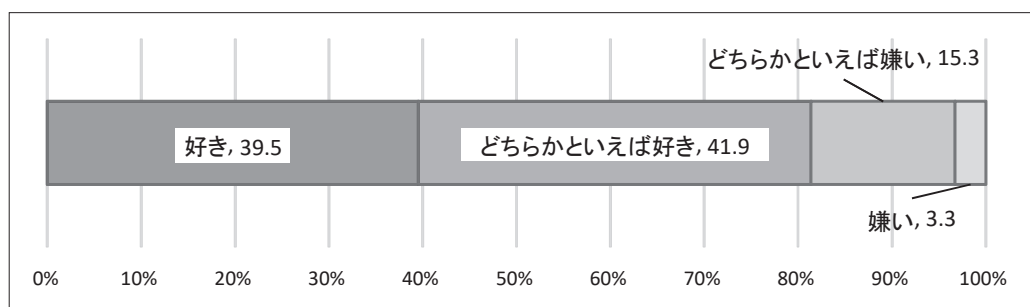


図3 組体操の好き嫌い n = 235

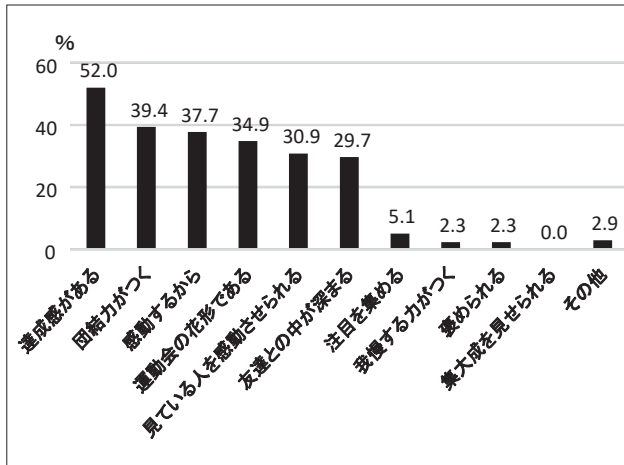


図4-1 組体操が好きな理由(複数回答)  
好き・どちらかといえば好きと回答した学生 n = 175

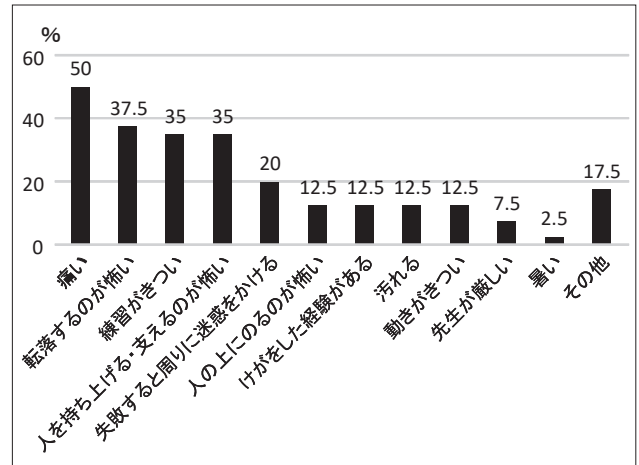


図4-2 組体操が嫌いな理由(複数回答)  
嫌い・どちらかといえば嫌いと回答した学生 n = 40

賛成が約半数(47.2%)を占め、どちらかといえば賛成(44.7%)を合わせると9割以上が実施に肯定的であった。

「組体操は必要だと思うか」の質問に対しては、85.1%(あてはまる34%、どちらかといえばあてはまる51.1%)が必要と回答した(図6)。「運動会に組体操を取り入れたいか」については、81.7%(あてはまる34.9%、どちらかといえばあてはまる46.8%)が取り入れたいと回答した。一方、「組体操を指導する自信があるか」については、約7割(あてはまらない14.5%、どちらかといえばあてはまらない52.8%)が組体操の指導に自信がないという結果となった。指導に自信がない理由は、「指導法を知らないから」が82.3%で最も多く、次いで経験がないから(43.7%)、けがを伴うから(43.7%)であった(図7-1)。組体操の指導に自信がある理由としては、「経験があるから」が64.9%で最も多く、次いで、「体育が得意だから」(46.8%)、「組体操が好きだから」(45.5%)であった(図7-2)。組体操を通して身につく力を尋ねたところ、団結力が92.8%で最も多く、次いで、集団行動の重要性(54%)、集中力、忍耐力、バランスや体幹と続いた(図8)。

以上のことから、小学校教員を目指す学生は、組体操の実施に対して肯定的であることがわかった。約8割の学生は、組体操を必要である、運動会に取り入れたいと考えているが、その指導に自信がないと回答した学生は約7割おり、組体操を実施したい思いと実際の指導の自信の間には乖離がみられた。一方、自信があると回答した学生の理由は、自分自身の経験や主観的な感情が判断基準であり、客観的な指導法を知っているわけではないことがわかる。今まで組体操が教師の経験に基づいて行われてきたことを考えると、自身の経験や体育が得意、組体操が好きという漠然とした理由で指導に自信を持ち実施することは危険である。特に小学校は中学校・高校と比較して、組体操の事故件数が圧倒的に多い。組体操を行うのであれば、自己の経験や主観でなく科学的な安全な指導法を学び、指導の力量をつけて実施する必要があると学生に認識してもらうことが重要であろう。組体操で身につく力としては、団結力をあげた学生が圧倒的に多く、友達と協力して創りあげる組体操は、団結力をつける方法として有効であると考えられていると推測される。

次に、組体操に対する意識(考え方やとらえ方等)をみるために、11の質問をした(図9)。「見ている人を

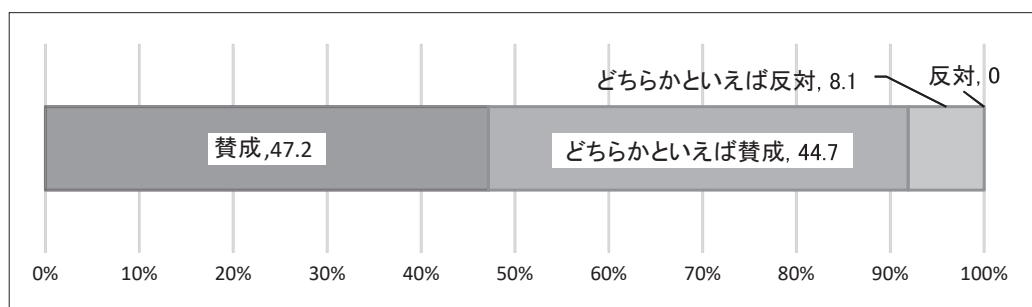


図5 組体操の実施に対する賛否 n = 235

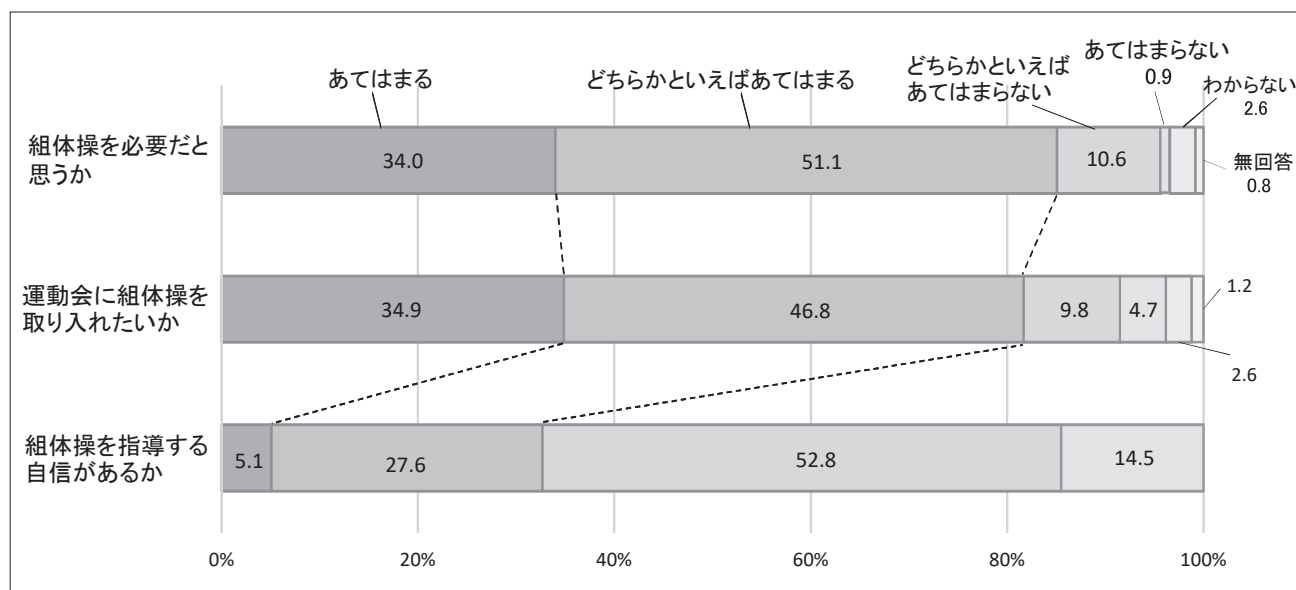


図6 組体操に対する意識 n = 235

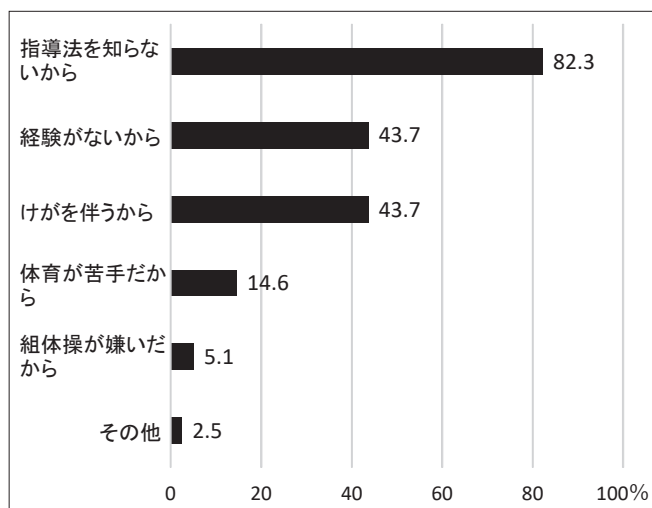
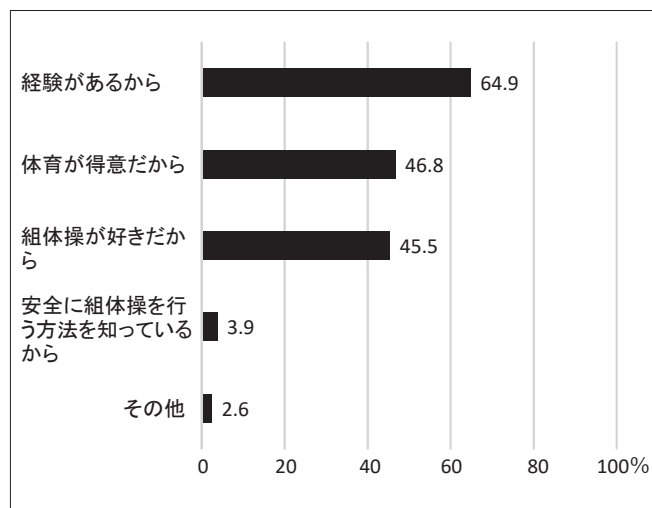
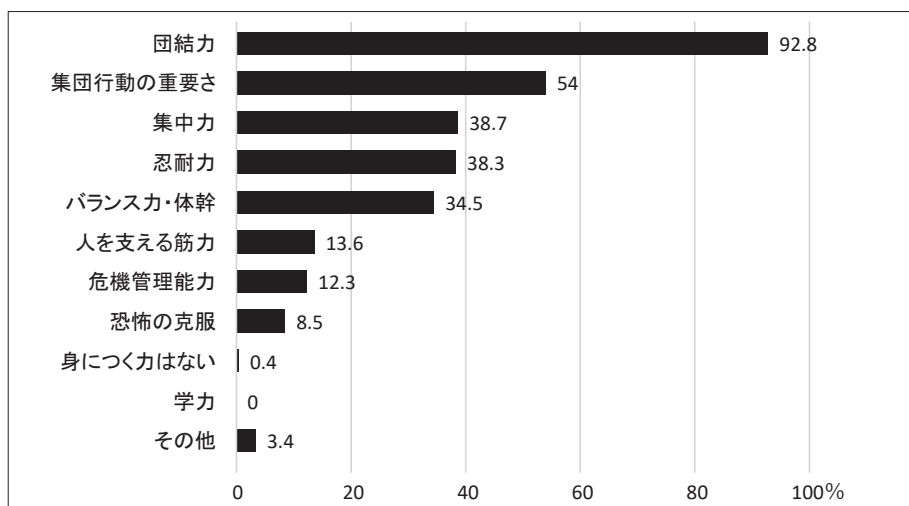
図7-1 組体操を指導する自信がない理由（複数回答）  
n = 158図7-2 組体操を指導する自信がある理由（複数回答）  
n = 77

図8 組体操を通して身につく力 n = 235

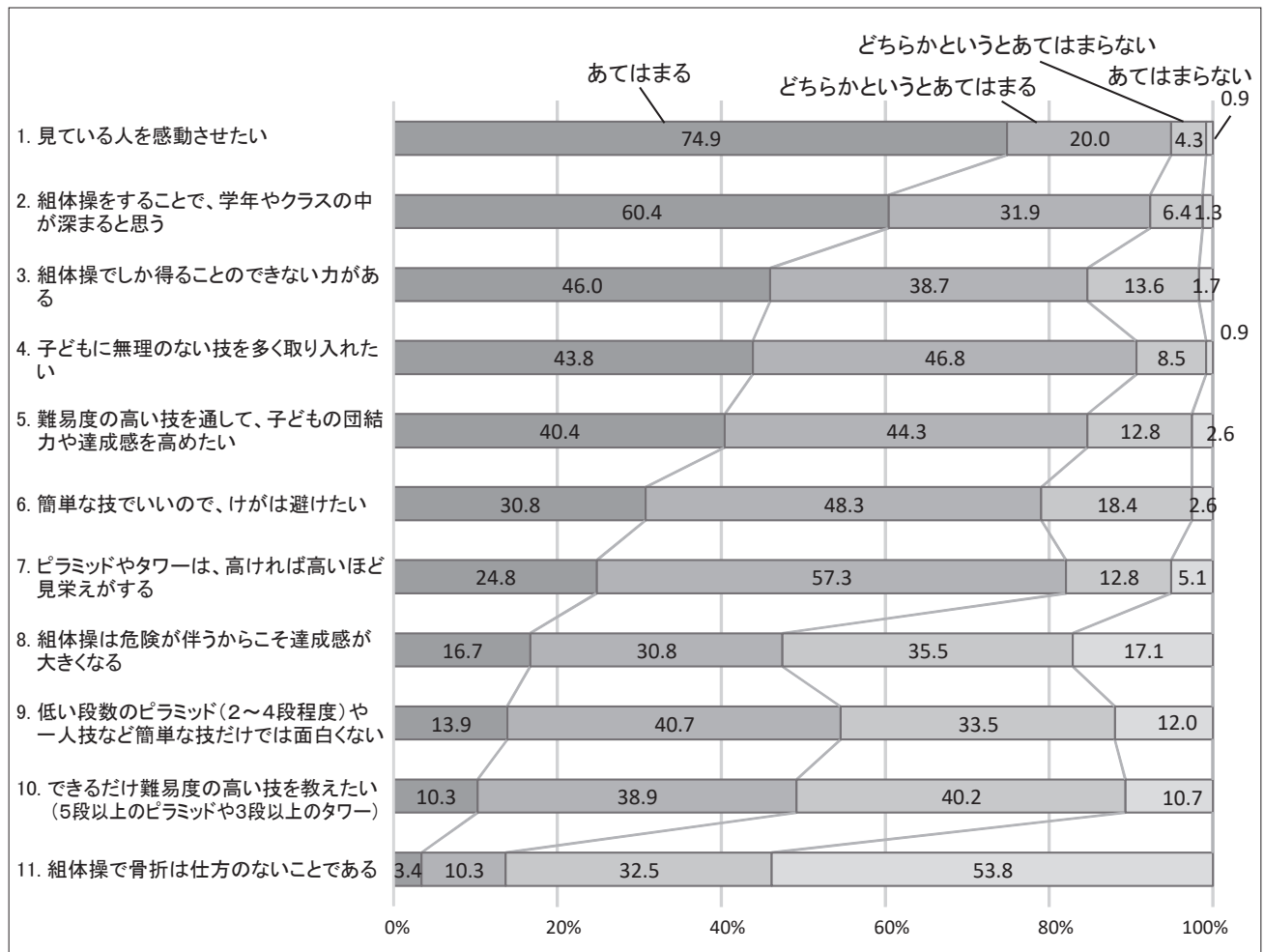


図9 組体操に対する意識（考え方やとらえ方） n = 235

感動させたいか」については、約75%があてはまると回答し、どちらかといえばあてはまる（20%）を合わせると、94.9%が見ている人を感動させたいと考えている。「組体操をすることで学年やクラスの中が深まると思うか」については、あてはまるが60.4%、どちらかといえばあてはまるが31.9%であり、全体の92.3%がそう考えている。「難易度の高い技を通して子どもの団結力や達成感を高めたい」については、84.7%があてはまる、どちらかといえばあてはまると回答した。一方、全体の約8割（79.1%）は「簡単な技でいいので、けがは避けたい」と回答し、全体の約9割（90.6%）は「子どもに無理のない技を多く取り入れたい」と回答している。学生の意識の中に、簡単な技でいいので、けがは避けたい、子供に無理のない技を取り入れたいという思いと、難易度の高い技を通して子供の団結力を深め、達成感を高めたいという、相反する思いが読み取れた。「ピラミッドやタワーは、高ければ高いほど見栄えがする」については、あてはまる、どちらかといえばあてはまるを合わせると、8割以上（82.1%）がそう思うと回答した。「できるだけ難易度の高い技を教えたい

（5段以上のピラミッドや3段以上のタワー）」に関しては、約半数（49.2%）がそう思うと回答した。「低い段数のピラミッド（2〜4段程度）や一人技など簡単な技だけでは面白くない」については、半数以上（あてはまる13.9%、どちらかといえばあてはまる40.7%、合計54.6%）が肯定的にとらえており、「組体操は危険を伴うからこそ達成感が大きくなる」に関しては、ほぼ半々となった（どちらかといえば肯定的が47.4%、どちらかといえば否定的が52.6%）。以上の結果から、組体操のとらえ方の中に、ピラミッドやタワーは高いほうが見栄えがする、危険も伴うがその分達成感も大きくなり、見ている人を感動させることができるという意識があると推察される。図9の項目9、10、の回答から、約半数の学生は、簡単な技だけでは面白くないと感じ、できれば難易度の高い技を教えたいと考えていると推測され、このような意識が「見栄え」や「見ている人を感動させたい」というショー的要素と結びついたときに、より巨大化、より高層化へと進んでしまう可能性があるのではないかと考える。

(3) 組体操の事故やケガに対する危険認知度



年間8000件以上、組体操中に事故が起きていることを知っていた割合は12.8%であり、約9割弱の学生は知らなかった（図10）。過去46年間に組体操で死亡事故が起きていることを知っている割合は8.5%、組体操の事故で障害が残った事例があることを知っている割合は2.6%であった。大阪府のY市立中学校で10段ピラミッドの崩壊があった事例を知っていた割合は31.9%、1990年、福岡県の県立高校で8段ピラミッドの崩壊により首を骨折、脊髄損傷した事例を知っていた割合は17.9%であった。以上のことから、組体操中の事故や事故事例の認知度は低いことがわかった。

#### (4) ピラミッドに関する知識

10段ピラミッドで、最も負荷のかかる位置の子供には、約3.4～3.9人分の体重がかかることを認知している割合は12.3%であった。ピラミッドが崩壊し始めると、手の施しようがないことを認知している割合は31.5%であった（図10）。

#### (5) 行政の通知に関して

2016年にスポーツ庁が出した「組体操による事故防止について」の通達に関しては、まったく知らないが67.1%を占めた（図11）。聞いたことがあるは28.9%、見たことがあるは1.8%であり、内容を理解している割合は2.2%であった。福岡市の市立学校で組体操のピラ

ミッドやタワーが禁止になったことに関しては、知っているが46.8%、知らないが53.2%でほぼ半々の割合となった（図12）。組体操の事故防止に対する教育行政の動きに関しては約7割の学生が知らず、聞いたことや見たことがあっても内容を理解している割合はわずか2.2%であり、組体操に対する社会の動向を学生が認知していないことが明らかになった。福岡市立学校の通知に関しては約半数は知っていたものの、スポーツ庁の通知を知らないことから、ピラミッドやタワーが禁止になった理由に関しては知らないと思われる。

## ま と め

本研究の目的は、小学校教員を志望する学生の組体操に対する意識、安全性や社会動向に関する認知度を把握することであった。本調査の分析により、以下のことが明らかになった。①9割以上の学生は組体操の経験があり、6割以上は小学校期に経験していた。組体操に対しては好意的にとらえており、友達との仲が深まり達成感や団結力を得られること、自分や見ている人が感動できることに魅力を感じている。②組体操の実施には肯定的であり、運動会で組体操を取り入れたいと考える学生は8割以上にのぼった。しかし、指導には自信がなく、組

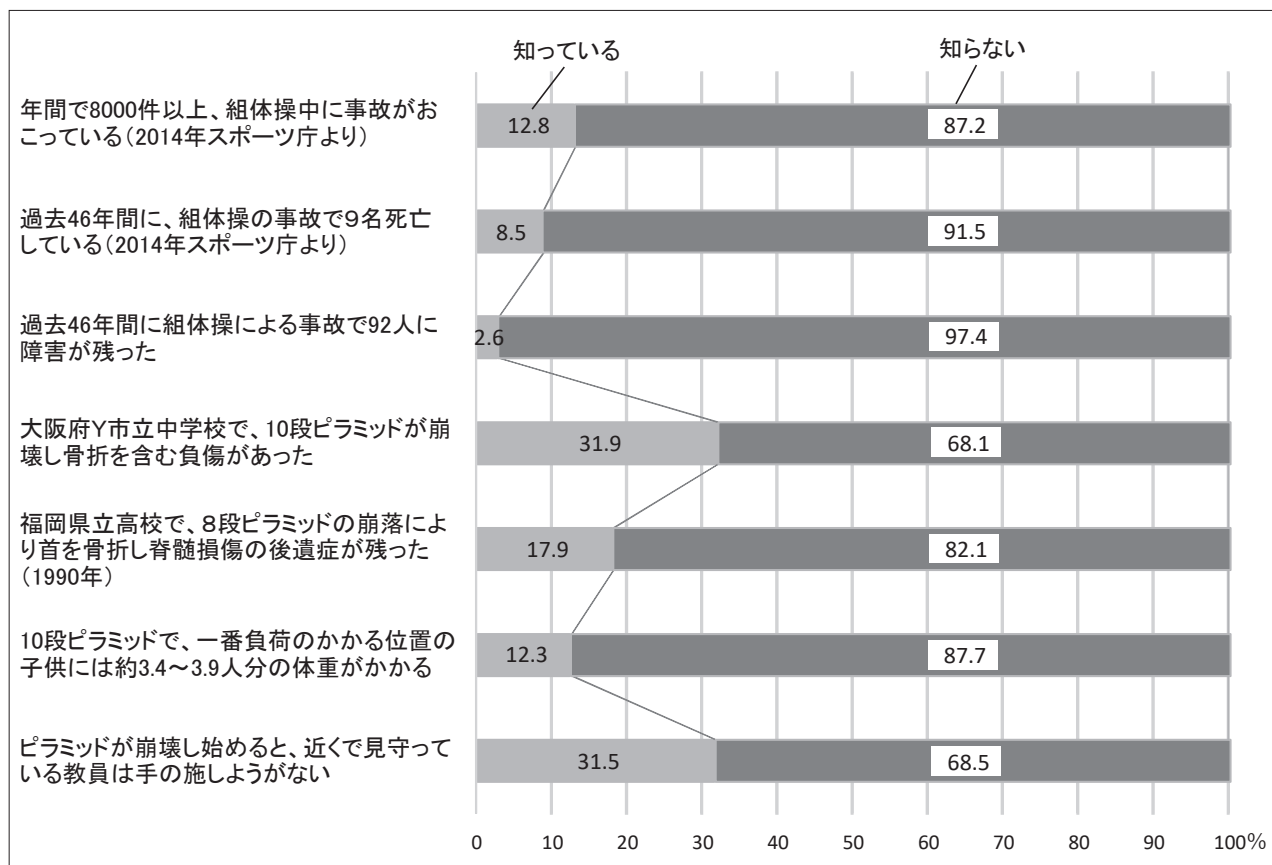


図10 組体操の事故やケガに対する危険認知度 n = 235

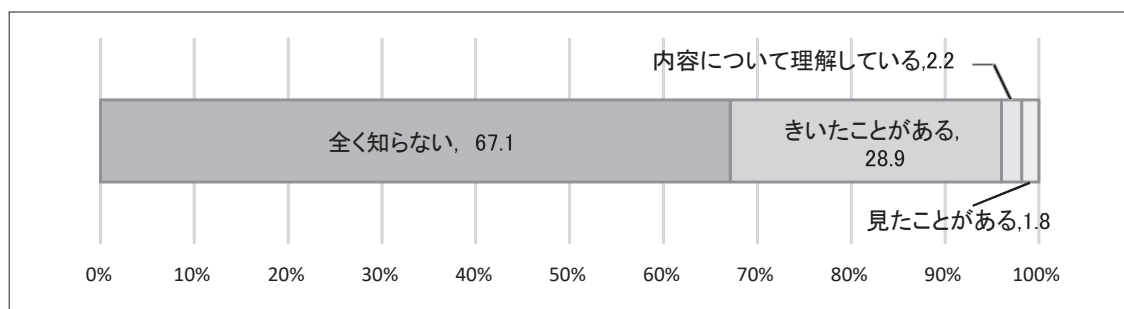


図11 認知度：2016年スポーツ庁「組体操等による事故の防止について」 n = 228

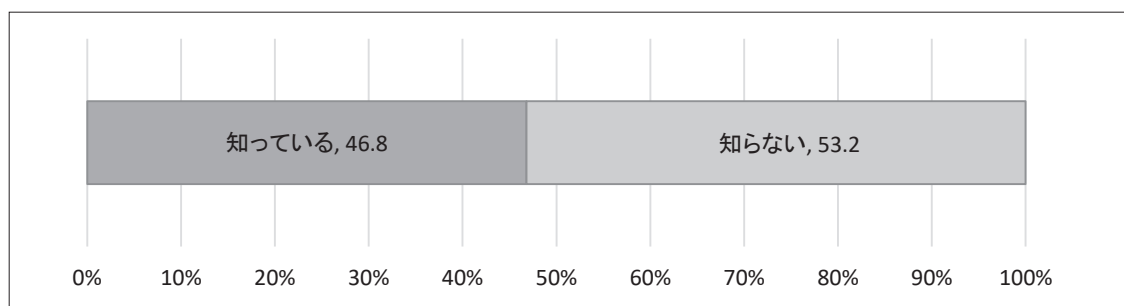


図12 認知度：福岡市立の学校では、組体操のピラミッド、タワーを禁止（2016） n = 235

体操を実施したい思いと実際の指導の自信との間には乖離がみられた。③3割程度ではあるが指導に自信があると回答した学生の判断基準は、自身の経験や主観的な感情であった。④団結力、達成感等の組体操でしか得ることのできない教育的な意義を見出している。⑤簡単な技でいいのだけが避けたい、子供に無理のない技を取り入れたいという思いと、難易度の高い技を通して子供の団結力を深め達成感を高めたいという、相反する思いが読み取れた。⑥組体操のとらえ方の中に、ピラミッドやタワーは高いほうが見栄えがする、危険も伴うがその分達成感も大きくなり、見ている人を感動させることができるという思いがあることがわかった。⑦約半数の学生は簡単な技だけでは面白くないと感じ、できれば難易度の高い技を教えたいと考えていた。⑧組体操の事故やケガに対する認知度及びピラミッドの危険性に関する認識は低かった。また、組体操に対する社会動向に関する認知度は低く、内容も理解している割合は低かった。

組体操は、学習指導要領に記載されている内容ではない<sup>6)</sup>。そのため、多くの教員養成系の大学では内容を扱うことは少ないと思われる。しかし、今回の調査を受けて、教員の意識を高めるために、将来、小学校教員を志望する学生に対して、組体操の事故や事故事例といった組体操のリスクや社会的動向に加え、組体操について考える機会の提供が必要であると感じた。組体操はピラミッドやタワーといった見栄えの良い大技だけではない。難易度は高くなくても、達成感や団結力を感じられる組体操はある。今後、どのような形で組体操が可能な

のか、また組体操ではなく他の形で工夫できないか等、柔軟な発想で学生と共に考えていきたいと考える。

(注1) 日本スポーツ振興センターで組体操のカテゴリーが設定されたのは、平成23年（2011年）以降であり、それ以前のデータはない。

(注2) 日本スポーツ振興センターによる学校管理下の災害「平成29年度版」のデータをもとに算出した。

## 謝 辞

本研究のアンケートの一部は、馬場ゆうなぎさんと作成したものです。ここに記して感謝いたします。本研究に際し、ご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。

## 参考文献

- (1) 日本スポーツ振興センター 学校事故事例検索データベース <http://www.jpnsport.go.jp>
- (2) スポーツ庁 組体操等による事故防止について 別添1 平成28年3月25日 2016
- (3) スポーツ庁 組体操等による事故防止について 平成28年3月25日 2016
- (4) 福岡市教育委員会 PRESS RELEASE <http://www.city.fukuoka.lg.jp> 2016
- (5) 日本スポーツ振興センター 学校管理下の災害「平成29年度版」 2017
- (6) 文部科学省 小学校・中学校・高等学校学習指導要領（平

成29年告示) 解説 体育編 2017

- (7) 独立行政法人日本スポーツ振興センター 平成28年度スポーツ庁委託事業 スポーツ事故防止対策推進事業 体育的行事における事故防止事例集 2017
- (8) 内田良 教育という病—子どもと先生を苦しめる「教育リスク」 光文社新書 2015
- (9) 学校リスク研究所 学校管理課の組体操による障害事故 <http://www.dadala.net>
- (10) 西山豊 都道府県組体操事故統計(2017年版) <http://www.geocities.jp> 2017
- (11) 日本スポーツ振興センター 学校の管理下における事故の統計情報や事例 [http://www.jpnsport.go.jp/anken/anken\\_school/tabid/1624/Default.aspx](http://www.jpnsport.go.jp/anken/anken_school/tabid/1624/Default.aspx)
- (12) 奈良県 組体操による事故の概要 (独) 日本スポーツ振興センターの災害共済給付のデータより [www.pdf.nara.jp/](http://www.pdf.nara.jp/)
- (13) 千葉県教育委員会 組体操の実施に関する調査の結果について <http://pref.chiba.lg.jp/> 2016